

〔防衛研究所創立五十周年記念に寄せて〕

戦史研究の今日的意義

防衛研究所長（第二八代） 柳澤協二

防研戦史部は、昭和三十一年に陸自幹部学校戦史室を引き継いで発足し、大東亜戦争を中心とする戦史資料の収集整理にあたる傍ら、戦史関係の研究、教育にあたってきました。昭和五三年には約二〇年の歳月をかけた『戦史叢書』一〇二巻の刊行を完了しています。大東亜戦争は、近代日本が経験した最大の戦争であり、二一世紀を迎えた今日においても、個々の事実関係やその歴史的评价が完全に確定したとは言いきれない状況にあります。また、「戦争を知らない世代」が大半を占めるにいたった今日、従軍された方々の想いとそれを風化させたくない人々の想いは、様々な形で日本社会に受け継がれようとしています。

こうした歴史の語り部としての貴重な史資料を蓄積する防研戦史部は、国民のため、日本近代史のための資料センターとしての役割を担っていかねばなりません。

同時に、戦史研究の本来の意義は、戦争という国家の危機を如何に乗り切り、あるいは未然に防ぐかという人類の古来からの知恵を集積、分析し、明日の国家や組織リーダーたちに指針を示すことにあります。それゆえ戦史は、勝敗や感情を離れ、科学的研究の対象たりうるのです。それにもかかわらず、戦史に他の学術分野にない特有のロマンが感じられるのは、戦いを決する大きな要因としての指揮官や戦争指導者たちのアートを対象としているからだと思えます。

人類の歴史を通じて科学技術は大きく進化し、国家、社会のあり方とともに戦争のあり方を変えてきました。近代軍隊は、国益を実現するため、最新の情報や科学技術に基づいて部隊建設や用兵のためのドクトリンを作り、指揮官は教育・訓練を通じてそれを習得します。しかしそれは、戦闘指揮や戦場管理の技術であつ

て「勝つためのノウハウ」ではない。勝つために必要なアートは、実戦か、または戦史を通じて体得するほかありません。

冷戦終結後、自衛隊の役割は我々の認識を超えて多様化しています。それは、国家的危機管理の対象の多様化、より広くは安全保障概念の拡大を背景にしているという意味で、個々の政権の選好というより時代の要請でもあるわけです。ここに、自衛隊あるいは国家的危機管理にあたるすべての人々の「実践」に寄与していく戦史研究の新たな地平が開けています。それは、歴史区分としての現代を対象としていることから、より学際的で国際的な手法を取り入れることができるし、また、取り入れていかなければならないと思います。

同時に、長年にわたる先人の努力にもかかわらず、たかだか五十数年前の戦争についてすら未だ収集・整理すべき膨大な史資料が残され、さらに多角的な観点からの検証も求められていることを考えれば、戦史研究体制の一層の充実が必要です。

こうした課題の大きさを考えると、何やら圧倒される思いもありますが、それだけに、戦史研究の灯火を一步ずつ広げていくことが防研の最大の使命であり、戦史研究者の皆さんの業績に敬意を払いつつ、さらに弛まぬ努力を期待しています。